

カキ「東京紅」の着果部位3枚摘葉が果実の着色促進および品質に及ぼす影響

池田行謙・河野 章
(園芸技術科)

【要 約】カキ「東京紅」は、9月下旬に果実の着果部位の葉を3枚摘葉することにより、果皮の着色が促進され、収穫は5日早まる。

【目 的】

カキ「東京紅」は、収穫時の果皮色の紅色が濃く（果頂部のカラーチャート(C.C)値8.0以上)、高糖度が特長の東京都オリジナル品種で、都内での普及が進んでいる。しかしながら、日照条件の優れない圃場環境や受光条件の悪い樹冠内部では、果実の着色遅延が見られ、さらには近年の秋期の気温が平年より高く推移しているなどにより、収穫時期が全体的に後進しており、このことが有利販売を困難にしている。そこで本試験では、収穫前の摘葉処理が果実の着色促進に及ぼす効果を明らかにし、収穫期前進のための技術開発を目指す。

【方 法】

灰色低地土圃場に植栽された「東京紅」9年生を供試した。試験区は、摘葉処理区と無処理区の2区を設定し、処理は1区1樹5果の3反復とした。処理日は、平年の収穫始期である10月下旬の概ね30日前となる9月28日と20日前となる10月6日に設定し、果実を覆う葉を約3枚摘葉した(図1)。摘葉後は、約4日間隔で果実の果頂部および赤道部の果皮色値(C.C値)を測定した。収穫は、果頂部のC.C値が8.0以上に達した時点で行い、果実品質調査に供した。調査日は、9月28日摘葉区で2012年11月16日、10月6日摘葉区および無処理区で11月19日に実施した。

【成果の概要】

1. 摘葉処理による着色促進は、9月28日摘葉区においては、果実果頂部・赤道部いずれの部位においても確認された。処理10日後には無処理区に比べて果皮色値で約0.5高くなり、その後ほぼその差を保って推移した(図2)。一方、10月6日摘葉区では、果実果頂部における効果が認められなかった。赤道部においては処理4日後から効果が確認され、無処理区に比べて約0.5高く推移したものの、10月下旬以降、無処理区との差は減少し、収穫時にはほぼ差は認められなかった(図2)。
2. 果頂部のC.C値が収穫の目安となる8.0以上に達したのは、9月28日摘葉区では11月14日(C.C値8.2)、10月6日摘葉区および無処理区では11月19日(それぞれC.C値8.4、8.1)であったことから、摘葉処理により、収穫時期は5日早まった(図2)。
3. 摘葉処理や処理時期の違いによる果実品質の差は、判然としなかった(表1)。
4. 摘葉処理による果皮障害果や病害虫果の発生等は確認されなかった(データ省略)。
5. まとめ：9月下旬における「東京紅」の果実の着果部位の3枚摘葉処理は、果実の着色促進に有効である。これにより、収穫時期を5日早めることが可能になる。



図1 「東京紅」の着果部位の葉を摘葉した様子（左：処理前，右：処理後）

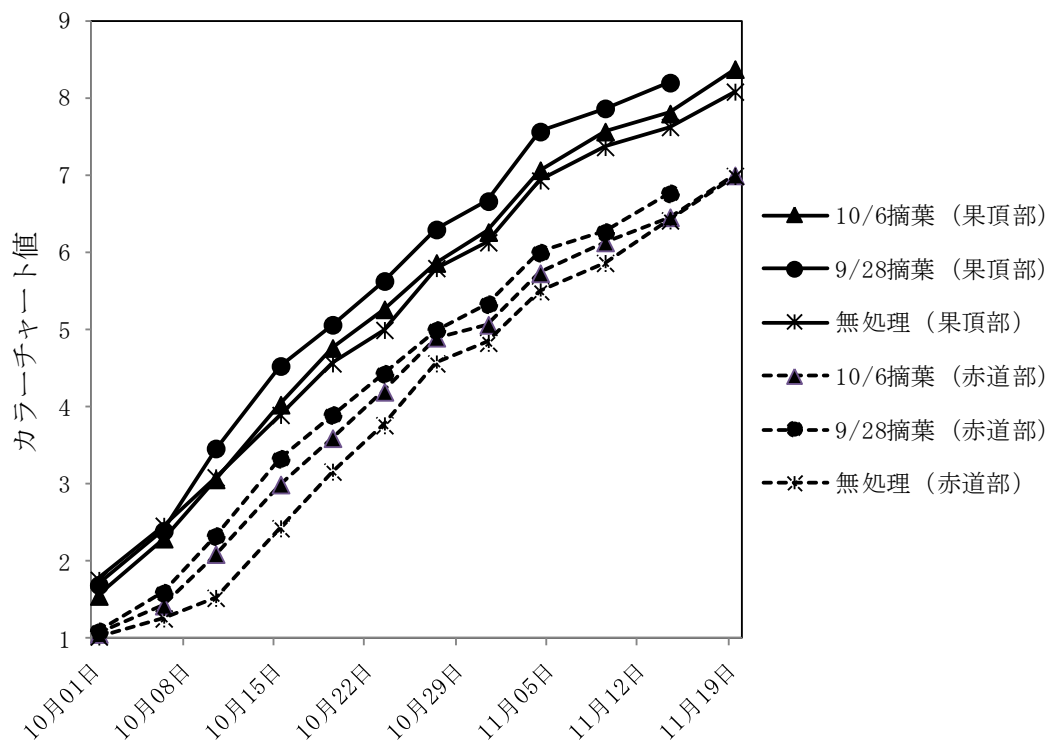


図2 時期別の摘葉処理による「東京紅」の果皮色の推移

表1 時期別の摘葉処理が「東京紅」の果実品質に及ぼす影響

試験区	果実重 (g)	糖度 (Brix%)	硬度 (kg)
9月28日摘葉	304.5	15.9a	1.84a
10月6日摘葉	313.8	16.2a	1.77a
無処理	313.2	16.5a	1.83a

Dunnettの多重検定で同符号間に5%水準で有意差なし
符号なしは検定なし